

ロマネ・コンティ・ 一九三五年

開高 健 六つの短篇小説



文春文



文春文庫

ロマネ・コンティ・一九三五年

定価はカバーに
表示してあります

1981年7月25日 第1刷

1991年3月15日 第5刷

著者 開高健

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-712704-0

文 春 文 庫

ロマネ・コンティ・一九三五年

開 高 健



ロマネ・コンティ・一九三五年〈目次〉

玉、碎ける 7

飽満の種子 25

貝塚をつくる 63

黄昏の力 99

渚にて 119

ロマネ・コンティ・一九三五年 145

解説・高橋英夫

191

ロマネ・コンティ・一九三五年

玉、
砕ける

ある朝遅く、どこかの首都で眼がさめると、栄光の頂上にもいず、大きな褐色のカブト虫にもなっていないけれど、帰国の決心がついているのを発見する。一時間ほどシーツのなかでもぞもぞしながら物思いにふけり、あちらこちらから眺めてみるけれどその決心は変らないとわかり、ベッドからぬけだす。焼きたてのパンの香りが漂い、飾窓の燦^{きらめ}きにみたされた大通りへでかけ、いきあたりばったりの航空会社の支店へ入っていき、東京行きの南回りの便をさがして予約する。香港で一日か二日すごしたいからどうしても南回りの便でないといけないのである。予約をすませてガラス扉をおして歩道へでようとすると、改行なしにつづいてきた長い文章にビリオッドがうたれたように感ずる。つぎに改行になって文章はつづいていくはずだけれど何が書かれるのかまったくわからないとも感ずる。しかし、その未知には昂揚が感じられない。出国のときには純白の原稿用紙をまえにしたような不安の新鮮な輝きがあり、朦朧^{もうろう}がいきいきと閃^{ひらめ}きつつ漂って

いるのだが、帰国となると、点を一つうって、行を一つ改めるだけのことで、そのさきにあるのはやはり朦朧だけれど、不安の閃きもない。ちょっと以前までは、そんな、ただ行を一つあらためるだけのことに、襪^おせやすいけれどそこはかとなし昂揚をおぼえたものだが、年をとるにつれて何も感じなくなってしまった。行と行のあいだに何か謎のような涼しい淵があったのに、いまは水枯れした、しらちゃけた河原を感じるだけである。ホテルにもどってスーツケースの荷作りをはじめると、確実に体の背後か左右のどこかに黴^{かび}が芽をだすのをおぼえる。エレベーターで上ったり下ったりし、フロントへ行って勘定をすませ、スーツケースをはこびだし、スーツケースと体を空港行きのバスにつみこみ、せいぜいてきぱきと身ぶりにふけてみても、黴はたちまちはびこって体を蔽^{おほ}いはじめる。肩、胸、腹、足のいたるところにそれはみっしりと繁殖し、私の外形を完全に保ったままでじわじわと蚕食^{さんしょく}にかかる。東京に近づけば近づくだけ黴はいよいよくまなく繁殖して、私は憂鬱に犯されるままになり、無気力になっていく。長大なジュラルミンの円筒に入れられて綿雲の海を疾過しつつ、数カ月の浮遊をふりかえて、昨日か一昨日かに終ったばかりのことなのに、まるで十年以前のことだったような郷愁をさそわれる。知りすぎて嫌悪しぬいたあげくとびだしたはずのところへふたたびおめおめと帰っていかなければならぬ。戦争をしないうちに敗れてしまった軍の敗残兵のようにうなだれてもどっていかなければならぬ。毎度毎度性こりもなく繰りかえす愚行の輪、その一つをふやしただけにすぎないのか。いままさらのようにその思いに圧倒されて、腕も足も狭いシートに束縛されたままになる。羽田につけ

ば税関のどきくきにまぎれてちょっと忘れるだろうが、一枚のガラス屏をおしてそこをでてしまえば、ふたたび黴の大群が、どうしようもなく、もどってくるのだ。一カ月か二カ月すれば私は青や灰のもわもわとした黴に蔽われて雪だるまのようになってしまう。わかりきっているのだけれど、そこへもどっていくしかない。適した場所が見つからなかったばかりにいやいやもどっていくしかない。消えられなかったばかりにはじきかえされる。

九竜半島の小さなホテルに入ると、よれよれの古い手帖を繰って張立人の電話番号をさがして、電話をかける。張が留守のときには、私は菜館のメニューを読むぐらいの中国語しか喋れないから、私の名前とホテルの名前だけをいつて切る。翌朝、九時か十時頃にあらためて電話をすると、きつと張の、初老だけれど迫力のある、炸けたような、流暢な日本語の挨拶が耳にとびこんでくる。そこでネイザン・ロードの角とか、スター・フェリーの埠頭とか、ときには奇怪なタイガー・バーム公園の入口とかをうちあわせて、数時間後に会うことになる。張はやせこけてしなびかかった初老の男だが、いつも、うなだれ気味に歩いてきて、突然顔をあげ、眼と歯を一度に剝いて破顔する癖がある。笑うと口が耳まで裂けるのではあるまいかと思うことが、ときにはあるけれど、タバコで色づいた、そのニユツとした歯を見ると、私はほのぼのとなる。ニコチン染めのそのきたならしい歯を見たときに歳月が消える。顔を崩して彼がいちどきに日本語で何やかや喋りはじめると、私は黴の大群がちょっとしりぞくのを感ずる。それはけっして消えることがなく、い

つでもすきがあればもたれかかり、蔽いかかり、食いこみにかろうとするが、張と会ってゐるあ
いだは犬のようにじっとしている。私は張と肩を並べて道を歩き、目撃してきたばかりのアフリ
カや中近東や東南アジアの戦争の話をする。張ははずむような足どりで歩き、私の話をじっと聞
いてから、舌うちしたり、呟いたりする。そして私の話がすむと、最近の大陸の情勢や、左右の
新聞の論説や、しばしば魯迅の言説を引用したりする。数年前にある日本人の記者に紹介されて
いっしょに食事したのがきっかけになり、その記者はとくに東京へ帰ってしまったけれど、私
は香港へくるたびに張と会って、散歩をしたり、食事をしたりする習慣になっている。しかし、
彼の家の電話番号は知っているけれど、招かれたことはなく、前歴や職業のこともほとんど私は
知らないのである。日本の大学を卒業しているので日本語は流暢そのもので、日本文学について
はなみなみなならぬ素養の持主だとはわかつていなければならない、小さな貿易商店で働きつつ、ときどき
あちらこちらの新聞に随筆を書いてポケット・マネーを得ているらしいとしかわからない。彼は
私をつれて繁華なネイザン・ロードを歩き、スイスの時計の看板があつて『海王牌』と書いてあ
れば、それはオメガ・シー・マスターのことだと教えてくれる。小さな本屋の店さきでよたよた
の挿絵入りのパンフレットをとりあげ、人形がからみあつてゐる画のよこに『直行挺身』という
字があるのを見せ、正常位のことだと教えてくれたりする。また、中国語ではホテルのことは×
×酒店、レストランのことは△△酒家という習慣であるけれど、なぜそうなのかは誰にもわから
ないと教えてくれたりするのである。

最近数年間、会えばきつと話になるけれど、けつして解決を見ない話題がある。それは東京では冗談か世迷言と聞かれそうだが、ここでは痛切な主題である。白か黒か。右か左か。有か無か。あれかこれか。どちらか一つを選べ。選ばなければ殺す。しかも沈黙していることはならぬといわれて、どちらも選びたくなかった場合、どういつて切りぬけたらよいかという問題である。二つの椅子があつてどちらかにすわるがいい。どちらにすわってもいいが、二つの椅子のあいだにたつことはならぬというわけである。しかも相手は二つの椅子があるとほのめかしてはいるけれど、はじめから一つの椅子にすわることしか期待していない気配であつて、もう一つの椅子を選んだらとたんに『シャアバ（殺せ）！』、『ターバ（打て）！』、『タータオ（打倒）！』と叫びだすとわかつている。こんな場合にどちらの椅子にもすわらずに、しかも少くともその場だけは相手を満足させる返答をしてまぬがれるとしたら、どんな返答をしたらいいのだろうか。史上にそういう例があるのではないだろうか。数千年間の治乱興亡にみちみちた中国史には、きつと何か、もだえぬいたあげく英知を發揮したものがいるのではないか。何かそんな例はないものか。名目はないものか。

はじめてそう切りだしたのは私のほうからで、どこか裏町の小さな飲茶屋でシューマイを食べているときだった。いささか軽い口調で謎々のようないいかたをしたのだったが、張はぴくりと肩をふるわせ、たちまち苦渋のいろを眼に浮べた。彼はシューマイを食べかけたまま皿をよこにyse、タバコを一本ぬきだすと、鶏の骨のようにやせこけた指で大事そうに二度、三度撫でた。

それからいいねいに火をつけると深く吸いこみ、ゆるゆると煙りを吐きながら、^{つぶや}呷いた。

「馬でもないが虎でもないというやつですな。昔の中国人の挨拶にはマーマーフーフーというのがあった。字で書くと馬々虎々です。なかなかうまい表現で、馬虎主義と呼ばれたりしたもんですが、どうもそう答えたんではやられてしまいそうですね。あいまいなことをいってやるようだけれど、あいまいであることをハッキリ宣言してるんですからね、これは。これじゃ、やられるな。まっさきにやられそう。どう答えたらいいのかな。厄介なことをいいだしましたな」

つぎに会うときまでによく考えておいてほしいといつてその場は別れたのだったが、張はつよい打撲をうけたような顔で考えこみ、動作がのろのろしていた。シューマイを食べかけたままほうつてあるのでそのことをいうと、彼は苦笑して紙きれに何か書きつけ、食事のときにはこれが必要なですといった。紙きれには『莫談国事』とあった。政治の議論をするなということであろう。私は何度も不注意を謝った。

その後、一年おいて、二年おいて、ときには三年おいて、香港に立寄るたびに張と会い、散歩したり食事したりしながら——すっかり食事が終わってからときめたが——この命題をだしてみるのだが、いつも彼は頭をひねって考えこむか、苦笑するか、もうちょっと待ってくれというばかりだった。私は私で彼にたずねるだけで何の知恵も浮ばなかったから、謎は何年たっても謎のまま苛酷の顔つきの朦朧として漂っている。もしそんな妙手があるものとすればみんながみんな使いたがるだろうし、そういう状況は続発しつづけるばかりなのだから、そうなれば妙手はたちま

ち妙手でなくなる。だから、やっぱり謎のままでこれはのこるしかないのかもしれない。しかし、ときには、たとえば張があるとき老舎の話をしてくれたとき、何か強烈な暗示をうけたような気がした。ずっと以前のことになるが文学代表団の団長として老舎は日本を訪れたが、その帰途に香港に立寄ったことがある。張はある新聞にインタヴュー記事を書くようなたのまれてホテルへでかけた。老舎は張に会うことは会ってくれたが、何も記事になるようなことは語ってくれなかった。革命後の知識人の生活はどうですかと、しつこくたずねただけけれど、そのたびにはぐらかされた。あまりそれが度重なるので、張は、老舎はもう作家として衰退してしまったのではないかとさえ考えはじめた。ところがそのうちに老舎は田舎料理の話をはじめ、三時間にわたって滔々^{とうとう}とよどみなく描写しつづけた。重慶か、成都か。どこかそのあたりの古い町には何百年と火を絶やしたことの無い巨大な鉄釜があり、ネギ、白菜、芋、牛の頭、豚の足、何でもかでもかたっぱしからほうりこんでぐらぐらと煮たてる。客はそのまわりに群がって柄杓^{ひしゃく}で汲みだし、椀に盛って食べ、料金は椀の数できめることになっている。ただそれだけのことを、老舎は、何を煮るか、どんな泡がたつか、汁はどんな味がするか、一人あたり何杯ぐらい食べられるものか、徹底的に、三時間にわたって、微細、生彩をきわめて語り、語り終ると部屋に消えた。

「……何しろ突然のことだね。あれよあれよというすきもない。それはもうみごとなものでしたね。私は老舎の作品では『四世同堂』よりも『駱駝祥子』のほうを買ってるんですが、久しぶりに読みかえたような気持になりました。あの『駱駝祥子』のヒリヒリするような辛辣^{しんちやく}と観察眼